



高校生のとき、時間はたっぷりあるように見えて、その実宿題やテストやクラブや友だちとのおしゃべりや、そのほか様々なことで忙しく、自分の時間はあまりないように感じます。そんな中で、自分のやりたいことは何か、自分を形成するものは何か、考えていくことはとても困難です。自分は何が好きか、勉強だけしていても見えてこないことも多く、多くの高校生がこれから始まる自分の人生に自分で一步を踏み出すことに戸惑っているのではないのでしょうか。やりたいことが明確に分からなくても、時間が過ぎ、それなりの進路選択をして、気がついたら世の中の流れに流されている、ということも仕方がないことでしょうか。本当にやりたいと思ったことは、仕事でなくても、どんなに年を取っても忘れないし、情熱は失われないはず。今は見つからなくても、焦る必要はありません。焦らず、あきらめず、いろいろな人の人生に触れて自分はどうか、そのやりたい気持ちは本物か、人として生きる正義に反しないか、胸の内できっちり温めて自分という人間を見極めてください。

高校時代と今と

数学科 中南典子

高校時代に読んだ本って？日々、勉強に追われている気になってなかなか本を手にしなかった。しいて挙げるなら美誠社の「高校生の基礎からの英語」。この英語の参考書は今でも持っている。毎日読んだ。つらい英語の授業を共に乗り切った戦友である。でも参考書だ。



小学校時代には日本の歴史漫画「野口英世」にはまった。幼い時にいろいろの火に手を突っ込んでしまい、火傷をし手が開かなくなってしまうが、好意で手術をしてもらうことができ、それを機に医者を目指すようになる。幼い私は火傷をした手の絵が怖かったが、困難を乗り越え、自分を犠牲にして世のため人のために尽くす姿が輝かしく思え、何度も読んだ記憶がある。中学校時代は「アドベンチャーブック」？というのかなんなのか忘れたが、今というロールプレイングゲームの本バージョンで、推理本で、Aを選ぶなら12ページ、Bを選ぶなら15ページなどというふうに、ページをめくっていく。それがとても楽しくて、何冊も読んだ。本の名前は覚えていないし、今、そのような本は本屋にあるのだろうか。

逆転しない正義『アンパンマンの遺書』中南典子



やなせたかし氏



最近読んだ本はやなせたかしの「アンパンマンの遺書」。

泣いている子供を笑顔にする、世のお母さんたちの救世主、アンパンマンを生み出したやなせたかしの本。タイトルはドキッとするが、内容は予想通りやなせたかしの自伝である。

やなせさんがなぜこの遺書を書くことになったかというと、長年連れ添った奥さんが亡くなったことがきっかけで、自分のことは自分で書き遺しておかないと誰にもわからないと思ったらしい。やなせさんは2013年に94歳で亡くなった。戦争にも出兵したそうだ。幸い、アジアで終戦を迎え帰国した。子供の時から忠君愛国の思想で育てられ、日本の戦争は聖戦で正義の戦い。正義のために戦うのだから命を落としても仕方ないと教えられてきた。しかし正義のための戦いなんてどこにもなく、正義はある日突然逆転する。正義は信じがたい。戦中・戦後の中を必死で生き抜いてきた。このことが戦後のやなせさんの思想の基本となるそうだ。目の前で餓死しそうな人がいれば、その人に1片のパンを与えること。それが逆転しない正義、献身と愛だそうだ。これがアンパンマンの原点となる。

この後、記者の仕事や三越の宣伝部の仕事など、いろいろな仕事をしながら無名時代を過ごす。その時代のことを「前途は漠然としていて、無限大の高く白いすべすべの巨大な壁」と言っている。漫画以外の様々な仕事を引き受け、こなしていく。そんな中、大人向けに「アンパンマン」と題された物語を描く。主人公は小太りの男で、おなかをすかせた子供にアンパンを配って回る。主人公はヒーローとは程遠い存在で、もちろん人気は出なかった。が、やなせさんの考える正義が作品となっている。その後、少しずつ幼児に人気が出てきて、やなせさんが69歳のときにアニメとなって大ヒットする。



印象が深かったのは「ぼくは優れた知性の人間ではない。何をやらせても中くらいで、むづかしいことは理解できない」という一文である。なんだか肩の力が抜ける、やなせさんの人柄がよく分かる部分である。

本当に自分がやりたいことは、世に認められなくても自分なりにやり続けることでいつかチャンスが訪れる。そのチャンスをつかむためには一見、関係ないと思われることもやってみる。思い続けることで漠然とした前途も開けてくるであろう。